



悩める若者、危ぶむなかれ

30歳のころ、自分自身について深刻に悩んだ時期があった。社会の仕組みが何となく見え始め、理想と現実の落差を感じ、ふがいない自分に怒り、それをひどく責めた。過去に後悔し、未来に絶望すらしていた時、前に進むために反省しようと、過

去の自分の歴史を思い出そうとするが今度はそれが急に思い出せなくなる。きっと思い出したくもなかったのだろう。そして自己嫌悪のループにはまる、そんな経験をしたことがある方も少なくないと思う。

そんな時に、ふと立ち寄った古本屋で出会った「二十歳のころ」(新潮社)という本に大きく心を揺さぶられ、救われた。

本によると、空海は四国で生まれ、18歳のころに京で大学に入学したが、ほどなくドロップアウトし、いづこにも属さない「私度僧」になった。独学の山岳修行を経て30代前半で遣唐使船に乗り、唐でめきめきと頭角

を現し、師に「密教のすべてを伝授する」といわしめた。しかしはっきりしないのが、大学を辞め遣唐使船に乗るまでの間にある空白だ。著者いわく、これが空海の人生を変えた大切な青春なのだ。

二十歳前後は人が自分を発見する時期であり、それ故に誤りを犯したり、ひどく悩んだりする事が多々ある。しかしそういう時期がなければどんな人生も成立しないのだから、安心しろと優しく諭された気がした。今でも印象深く残っている。いや、それ以上に「このような話が若者にできるように自分も生きてやる」と思ったほど大きく影響

を受けたのは間違いない。

人はつまらないことにこだわり、わずかなことで悩み、とるに足らないことで争うが、そのことに気が付かせるほどの大きな存在に出会えることは幸せである。若者にはそんな存在に出会うために、多くの人と触れる冒険をしてほしい。

この本の筆者、立花隆氏が先日亡くなった。多くのご教示に感謝し、心よりご冥福を祈ります。

たかみ・だいすけ 日本文理大 人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。40歳。